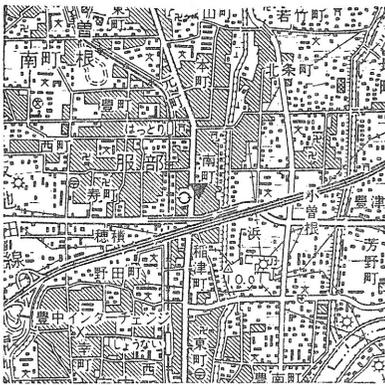


大阪・穂積遺跡

- 1 所在地 大阪府豊中市服部南町
- 2 調査期間 一九八五年(昭60)七月～八月
- 3 発掘機関 豊中市教育委員会
- 4 調査担当者 田上雅則
- 5 遺跡の種類 集落跡
- 6 遺跡の年代 弥生時代後期～室町時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要



(大阪西北部)

穂積遺跡は、猪名川、天竺川、神崎川などの大小河川によって形成された沖積平野に立地する、弥生時代後期から室町時代に亘る複合遺跡である。周辺には勝部遺跡、田能遺跡、庄内遺跡など学史的にも著名な遺跡が点在し、また、大阪府指定史跡の春日大社南郷目代今西氏屋敷に所蔵される『今西家文書』より、撰関家領垂水西牧榎坂郷に含まれる事が判明しており、考

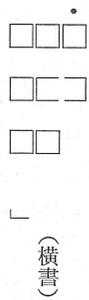
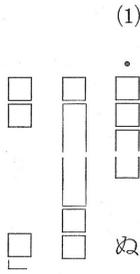
古学と文献とを対比する上でも、非常に注目されるところである。

当遺跡は、昭和初年に地元に住民によって発見され、戦前には弥生時代後期の土器を、この遺跡名に因んで「穂積式」と称し、畿内の後期弥生土器を指すものとして広く使用されたことから、学界でも著名な遺跡となった。しかし発見以来本格的な調査もされず、遺跡の実体が不明のまま五〇年余りも経過した。

近年に至って、数回の調査が実施され、弥生時代から古墳時代前期の良好な一括出土土器群や、桜井谷編年Ⅱ―2の須恵器を伴う径一八mの削平された円墳、鎌倉時代の掘立柱住居跡、井戸、条里制の坪境と考えられる溝を検出している。

一九八五年、マンション建設に伴う調査において、鎌倉時代の曲物を転用した井戸、掘立柱住居跡、溝を検出した。溝は東西に走行し、幅二m、深さ五〇cmを測り、堆積埋土より流水路と考えられるものである。木簡はこの溝より出土し、一四世紀初頭に比定される瓦器碗、土師器皿が共伴した。

8 木簡の积文・内容



(60)×(20)×2 081

上部、側辺を欠損している。判読できる文字は「ぬ」だけであるが、左右の最初の字形が類似しているため、同じ文章が数行記されているものと推定される。尚、裏面にも墨の痕跡が認められるが、文字であるか否かは判断できない。

(田上雅則)

